

流れを読む

蘇った「不死鳥」

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

アメリカの対外経常赤字が累増し、本年は五千億ドルを超える。思えば、八〇年代のレーガン政権時代に「双子の赤字」と揶揄され、その後「プラザ合意」を経て、ドルは大幅下落したが、当時の対外赤字は、千三百億ドルから千五百億ドルくらいであった。今から振り返ると何とつつましやかな赤字であろうか。現在三倍以上に赤字が膨らんでも、ドル暴落は起こりそうにない。むしろ強含みつつさえある。この二十年間に何が起こり、変わったのであろうか。確実な事は冷戦が終わり、アメリカが覇権国家となり、「帝国化」が進行している事である。

しかしその事の重大な歴史的意義がもつと強く認識されなければならぬ。十七世紀以降、いくたの帝国の興亡があった。スペイン、オランダ、イギリス等々。しかし現在のアメリカは、そのスケールと影響力でこれらの国々を格段と凌駕している。文字通りグローバルで地球全体を覆っており、如何なる国や地域もその影響を免れる事は出来ない。その意味で数百年ぶりの「大変化」が起きているのだ。アメリカ帝国体制の終焉論議が盛んだが、今後五十年はこの体制が続いていくものと考えられる。その鍵は、今や世界通貨となった「ドル」にある。そ

れを支える大きな「変化」を三点だけ挙げたい。

第一は中国である。アメリカの巨大赤字を日本と共に引き受けているのは中国である。しかし日本とは逆にドル帝国から「幸運」を贈られている。十三億という世界一の人口が「低賃銀」を武器に繁栄へと驍進している。そのエンジンは対米輸出であり、ドル高は一層のインセンティブとなる。しかもその主役は中国企業だけでなく、グローバル化した世界企業。中国最大の輸出企業は、アメリカの「ウォルマート」であり、年間輸出額は一兆円にも達する。

第二の変化がわが日本である。冷戦という歴史の幸運に恵まれて、外交、防衛等の国家の基本的機能をアメリカに委ね、ひたすら経済成長に邁進して世界一の高度成長を実現した。しかし八〇年代から歴史の流れは大きく変わった。成功があまりに見事だったので自らの体制変革が出来ず、悶え苦しんでいるのが日本である。大切な過渡期だった九〇年代にも、変革の国家戦略「が確立出来ず、財政支出と輸出の拡大に依存してきた。その結果、歴史上類例を見ない巨大な財政赤字とアメリカに対する膨大な債権たる五千五百億ドルもの外貨準備を抱え込ん

でしまった。ドル債権の目減りを避けるため円安(ドル高)を目指しても、大債務国アメリカは強いドル高には耐えられない。

第三の変化はアメリカのミクロ、即ち「企業」の強さの復活である。その例を「USスチール」に見よう。この会社は二十世紀幕明け(一九〇一年)と共に設立された。パナマ運河やエンバイヤステーツビル等を作り、第二次大戦中はたくさんの軍艦や爆撃機を作って、アメリカを資本主義のチャンピオンに押し上げた「巨人」である。しかし七〇年代から日本の鉄鋼メーカー等との競争に破れ、かつての栄光をことごとく破壊された。だが近年不死鳥の如く蘇ってきた。ドル安を強く求めたアメリカ製造業はむしろドル高を望むようになってきた。その秘密は世界的視野から企業買収を進め、ワールドチャンピオンを目指しているのだ。欧州第二のスチールメーカーをセルビアから買い、ポーランド、ブラジル、韓国へと買収の手を広げつつある。そのためにはドル高が必要。巨大な対外赤字でもドル安にならず、「アメリカ帝国」は拡大する。日本に危機感がない。